

美術の窓(152)

「東海道」の「丸子(鞠子)」図

大和文華館館長 浅野秀剛

昨年11月、東京の東洋文庫ミュージアムで「東洋文庫の北斎展」があり、その関連で、「北斎の東海道物について」と題した講演を行った。あまり知られていないが、北斎には7種の東海道物(東海道五拾三次)があり、その全体像について述べたのである。各シリーズ50数枚はあるので、7種だと400図近い数になる。その全図を見せたのでさすがに時間が足りなくなったが、概ね好評だったと自賛している。

ここ何年か、東海道五拾三次の各宿駅図がどのように成立していったのか、どのような関連、影響関係があるのかを調べている。対象作品が膨大であること、他の仕事もあるのでなかなか進まないが、死ぬまでには何かまとめようという気分なので、焦ってはいない。今回書くのはその一端、宿駅の一つである「丸子(鞠子)」図についてである。

「丸子(鞠子)」で最も有名なのは、歌川広重画「東海道五拾三次之内 丸子(鞠子) 名物茶店」(図1)である。丸子宿の茶店でとろろ汁を食する二人の旅人と、乳飲み子を背負って給仕する茶店の女房を描いた図であるが、この図は、十返舎一九「道中膝栗毛」を下敷きにしたものという説が定着している。広重と版元は、販売後もなく「丸子」を「鞠子」に改刻しているので、現存する図は「鞠子」が圧倒的に多い。広重は、約20種の東海道物を刊行し

ているが、その「丸子(鞠子)」図の過半は、とろろ汁に関連した図であり、残りは雪景色となっている。広重が三代豊国と合作した「双筆五十三次 鞠子」(1854年)は、上部の広重画が雪景色、下部の豊国画が十団子を提供する茶店を描いている。十団子は、丸子から岡部宿に行く途中の宇津の山の名物であった。実は広重も十団子の茶店を描いているが、それは、俗に行書東海道と呼ばれる間判のシリーズ「東海道五十三次之内」の「岡部宇津の山之図」である。

北斎の東海道物に目を転じると、7種のうち、実に6種の「鞠子」がとろろ汁を題材にしている(「円形枰東海道」と俗称される文化7年[1810]のものは宿場の俯瞰図)。それには理由がある。十返舎一九作画、享和3年(1803)刊「道中膝栗毛 後篇」の影響である。

検証してみると、浮世絵版画の東海道物の連作は、すべて一九の「膝栗毛」以降のものと考えべき、ということが分かってくる。「膝栗毛」初篇の刊行が享和2年春なので、北斎の7種のものだけでなく、喜多川歌麿画の「美人一代五十三次」(大判錦絵)も様式的には享和3～文化1年(1803～04)頃と比定できるのである。同じ頃、歌川豊広も「東海道五十三次」(九つ切判錦絵)を制作しているが、それも画中の賛から文化年間と判明する。未確認の栄松

斎長喜の小判「五十三次」もおそらく「膝栗毛」以降であろう。

「膝栗毛」の丸子の場面は、後篇の最後に出てくる。弥次郎兵衛と北八は結局とろろ汁を食いそこねて宇津の山に至り、そこの十団子も食いそこねて岡部宿に着く。記述はとろろ汁騒動が中心であり、その場面が人口に膾炙して、北斎と広重の作品に反映したのはほとんど疑いを入れない。

浮世絵版画の東海道物の連作はすべて一九の「膝栗毛」以降、と記したが、「膝栗毛」以前に東海道の宿駅図を連続的に描いた作品がなかったわけではない。その代表格が東海道中双六である。双六以外にも、摺物風の横中判「東海道五十三次」シリーズ、絵半切の絵本の「東海道五十三次」、そして享保(1716～36)期の刊行と推定される、近藤清春画、横細判漆絵6枚揃「東海道五十三次」や、清春画と同じ頃に刊行された二代鳥居清倍画、横細判漆絵6枚揃「東海道五十三次」が確認できる。それらの「丸子(鞠子)」図はどうだろうか。

「膝栗毛」以前の東海道物のうち最も早いと思われる清春の作品(ボストン美術館他蔵)の「まりこ」は、十団子の店を描いている(清倍の作品は未確認)。絵師未詳であるが、享保かそれよりあまり下らない時期のものと推定される「新板道中名所すこ六」(墨摺、鱗形屋孫兵衛版、東京都立図書館蔵)の「まりこ」も十団子、鈴木春信画、明和(1764～72)後期頃刊「(東海道五十三次道中双六)」(錦絵、版元未詳、東京都立図書館蔵、図2、図3)の「まりこ」も十団子である。明和後期～安永

(1772～81)期頃刊の北尾重政画「江都名物吾妻錦画 東海道細見双六」(錦絵、伊勢屋吉兵衛、伊勢屋金兵衛、西村屋与八版あり)の「鞠子」は、安部川越えの図で、その上部に宇津の山を描き「名物十だんご」と記している。安永4年刊、絵師未詳「(東海道五十三次双六)」(錦絵、西村屋与八版、東京都立図書館、国会図書館蔵)は、「鞠子」の次に「うつ山」を入れて「名物とうだんごかう」と記している。安永期頃制作と推定している摺物風の横中判と、同じ頃成立した絵半切的絵本の「東海道五十三次」は、安部川沿いの茶店の図となっている。

すなわち、安永期以前の「丸子(鞠子)」図に描かれている名物は、ほとんど十団子ということになる。なぜそうなったのだろうか。

東海道物の範囲を刊行物まで広げると、浅井了意作「東海道名所記」(仮名草子、万治[1658～61]期刊)は十団子のことにかなりの字数を費やし、遠近道印作、菱川師宣画「東海道分間絵図」(元禄3年[1690]刊)でも十団子の記載はあるが、両書ともとろろ汁には触れていない。時代が下り、「東海道名所図会」(寛政9年[1797]刊)に至って、とろろ汁については、芭蕉の句「梅若菜丸子の宿のとろろ汁」を紹介してやや詳しく述べるが、十団子については許六の句を紹介するのみで、扱い方が逆転する。その後に出されたのが「道中膝栗毛 後篇」である。

潮目は「東海道名所図会」と「道中膝栗毛 後篇」で、それを境に「丸子(鞠子)」名物の第一は、十団子からとろろ汁に替わったということになる。



図1



図2



図3

図1 中外産業株式会社原安三郎コレクション(『大浮世絵展』図録2019、より複写)

図2 東京都立中央図書館特別文庫蔵

図3 図2の部分

季刊 美のたより No.210

令和2年4月4日

発行 大和文華館